

## 第2章の2

### 自閉症・情緒障害特別支援学級を弾力的に活用した指導・支援

通常の学級において、学習面の困難さや生活のしにくさが見られ、授業の工夫や個別の配慮等をして、通常の学級集団では、その子どもに合った指導・支援が難しい場合があります。このようなとき、特別な支援を必要とする子どもの教育的ニーズに応えるために、自閉症・情緒障害特別支援学級を弾力的に活用して、個別または小集団で指導・支援することも有効です。

通常の学級から特別支援学級に籍を移すのではなく、一時的に特別支援学級を活用し、必要な指導・支援をしていくというものです。始めるときには、その子どもの個別の指導計画を検討するとともに、校内委員会の合意のもと、以下のような条件が整うかどうかをよく吟味し、全校職員の共通理解の上で進めることが大事です。

- ◇自閉症・情緒障害特別支援学級担任の過重な負担にならないこと。
- ◇その子が同じ教室で生活することにより、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している子どもたちの生活が混乱しないこと。
- ◇自閉症・情緒障害特別支援学級で活動することについて、本人と保護者が納得し見通しをもっていること。
- ◇自閉症・情緒障害特別支援学級の担任が一人で抱え込まずに、通常学級の担任との連携はもちろん、校内や外部の専門家と連携して、支援の輪を広げていけること。
- ◇校内委員会でその子の情報が共通理解され支援会議が定期的に、かつ必要に応じて開催される状況が整っていること。
- ◇その子の在籍する学級の子どもたちに適切に説明がなされること。 等

上記の条件が整わずに特別支援学級を活用した指導・支援をスタートした結果、「子どもの情緒が更に不安定になった」「担当する特別支援学級担任に過剰な負担がかかりダウンした」「それまで安定していた特別支援学級の子どもたちの生活が混乱した」…などの問題が生じている事実もあります。十分な配慮のもとに、特別支援学級を弾力的に活用した指導・支援に進めていきましょう。

## 事例 24

# 不登校の子どもを支える体制を全校で検討して

～大きな集団に戻る前に特別支援学級を活用して～

カイトさんは、4年生の3学期から欠席が続いていました。保護者との相談、医療機関と連携した支援会議などを重ねながら、支援策を検討してきました。以前からカイトさんと親しかった特別支援学級担任がキーパーソンとなり、校内で一对一の支援を行うことになりました。更にカイトさんの気持ちが学校に向いたと思われた時、学級に戻る前段階として、一時的に自閉症・情緒障害特別支援学級で学習する時間を設けました。校内の安心できる居場所から、徐々に自分の学級に戻って学習することができるようになった事例を紹介します。

### ◇ 欠席前のカイトさんの様子

カイトさんは、4年生の3学期に体調を崩して、登校途中で吐いてしまったことがありました。学習発表会の練習など、「頑張ってやらなければ」と思うと急に激しい吐き気におそわれてしまいます。少し元気になっても腹痛が続き、朝は食欲がなくなり、ふらふらして立ってられない状態になってしまい、結果として5年生の1学期まで欠席が続きました。

後になってカイトさんは、「勉強が大嫌いだった」「作文や絵を描くことが苦手。何をどうしていいかわからず苦痛だった」「嫌なことがあっても学校には行かなければいけないので、苦しいけれど無理をして登校していた」と、苦しかった頃の気持ちを伝えてくれました。



### ◇ 支援会議を通して

5年生の2学期になると、家でのカイトさんの状態が安定してきました。そこで、カイトさんの情報を共有した上で支援方針を決定するため、通院している病院の臨床心理士・母親・コーディネーター・学級担任で支援会議を開きました。発達検査の結果からは、カイトさんには認知機能にアンバランスな面があり、複数の情報をまとめる力が特に弱いことが推測されました。また、1学期中は学校の話は一切出さずに安心してゆっくり休んだことが、情緒の安定につながっていると考えられました。カイトさんの興味・関心が高い活動に、学校職員が誘ってみることが可能な状況ではないかと相談しました。しかし現在の学級担任は5学年からの担任なので、カイトさんとのかかわりが少なく、働きかけが難しい状況です。そこで、カイトさんが欠席し始める前からかかわりがあった、自・情障学級担任のヨコタ先生に、支援をお願いすることになりました。カイトさんの調子を見ながら、だれにも会わずに登校できる場所に母親と短時間登校し、ヨコタ先生と個別に活動していくことになりました。

### ◇ 校内支援体制の整備

ヨコタ先生が、カイトさんのキーパーソンとして動くことができるように、校内では支援体制の整備を進めました。まず、カイトさんが最も登校しやすい5時間目の時間に、教室を離れてマンツーマンで相談できる体制を整えました。5時間目は知障学級と自・情障学級の児童が合同でパソコンを利用する授業に変更し、1名の担任でも指導できるような指導体制にしました。また、母親との定期的な連絡も、ヨコタ先生が中心に行い、必要に応じて養護教諭も加わりました。

## ◇ 相談室への登校から始めて

学校では、カイトさんがだれにも会わずに入室できるように玄関から近い相談室を仕切り、廊下から中が見えないように環境を整えました。5年生の10月から、まずは週に2回、1時間程度、相談室での個別の学習を開始しました。

ヨコタ先生とカイトさんとは少しずつ会話が増え、登校してからの時間の使い方を相談して決めていきました。まず、近況を話す時間を確保した後、プラモデルを一緒に作ることにしました。そして後半の時間にはパソコンの学習ゲームをすることに決め、そのパターンを継続しました。本人の希望を聞いて、作りたいプラモデルを選択し、楽しく会話をしながらプラモデル作りをすることで、カイトさんの表情はしだいに明るくなっていきました。週2～3回、午後1時間半の登校のリズムは3か月ほど継続することができました。また、ヨコタ先生とカイトさんが個別学習をしている時間の最後には、学級担任が相談室に顔を出して、声を掛け、少しずつ会話ができる関係をつくっていきました。

## ◇ 特別支援学級をベースにして段階的に教室へ

別室での個別学習によって、カイトさんが楽しく安心して登校することができるようになってきたところで、次のステップを検討しました。まず、教科学習がない社会見学の日にみんなと一緒に行動してみることを提案してみました。カイトさんも、教科学習には不安を感じていたものの、仲のいい友だちを中心にみんなと出掛けることは楽しみにしており、一日みんなと活動を共にすることができました。

次の段階として、本人と相談しながら、午前中だけの登校を提案しました。ここでは、本人が取り組みやすい体育と総合的な学習の時間は在籍学級で学習し、他教科の時間は特別支援学級で過ごすことにしました。特別支援学級の教室にカイトさん用のスペースを確保し、学習内容も相談して決め、予定確認表を掲示するようにしました。この段階では、ヨコタ先生がマンツーマンでついている必要はなく、予定を確認した後は一人で学習活動に取り組むことができました。特別支援学級に在籍している子どもとの関係も良好で、年下の子どもはお兄さんのようにカイトさんを慕って声をかけることがあります。当初はとまどっていたカイトさんですが、簡単な会話を楽しめるようになりました。

6年生になってからも、すべての時間を教室で学習することには不安があるようでした。そこでカイトさんと相談し、段階的に学級での学習時間を増やすことにしました。大きな枠組みを教師が提示し、細かな内容は自分で判断・決定することを大切にしました。また、担任は言葉だけでなく図などを提示しながら説明を加えることや、苦手な絵や作文では予め手順を具体的に提示し、それでも書けなかったら無理をしなくてもいいことを伝えるような配慮をしていきました。さらに、母親と定期的に相談の時間を確保し、学校で無理をし過ぎていないか、家で変化は見られないか確認しながら支援を継続しています。

## &lt;カイトさん予定確認表&gt;

○月○日( )

1時間目 体育 6年1組

2時間目 ※

3時間目 総合 6年1組

4時間目 総合 6年1組

5時間目 算数 ○○学級

※先生と確認して決めよう

## 事例から学ぶ

この事例のように、不登校傾向の児童が再登校できるきっかけとなる時期があります。日ごろから校内委員会で児童の状態について情報交換して共通理解を図り、必要な時には全校体制でバックアップができるような柔軟な体制を作っていきます。また、キーパーソンとなる職員だけでなく、関係する職員で情報を共有し、学校全体でその子を見守る体制ができると、本人・保護者の安心感が増し、自信をもって、次の一步を踏み出していくことができると思われます。

## 事例 25

# 情緒面が安定するまで

## 一時的に特別支援学級を活用して

～落ち着いた環境で学習して自信を取り戻したユウジさん～

小学3年生のユウジさんは、音をはじめとする様々な刺激に過敏に反応してしまい、落ち着いて学習することが難しい状況がみられました。特に、学級内の数名の友だちの言葉に反応して興奮してしまい、トラブルになり、教室から飛び出してしまうこともありました。そこで、校内委員会で検討を重ね、一定の期間、一部を特別支援学級で学習する体制を組みました。落ち着いた環境で個に応じた学習を重ねることで、自信を取り戻し、学級に戻って落ち着いて学習することができるようになった事例について紹介します。

### ◇ 困っていたユウジさん

3年生のユウジさんは以前から多動傾向がみられましたが、今年になって特に衝動的な言動が目立つようになりました。友だちの会話の中で、少しでも自分がばかにされると感じると、衝動的に友だちに対して攻撃的な言動をとるのです。担任のシマダ先生もユウジさんの話を聞くようにしているのですが、その場にいられずに教室を飛び出すようになり、注意される場面が重なって自尊感情を下げてしまいました。「どうせ、何を言っても分かってもらえない」それがユウジさんの口癖になっていました。

### ◇ 当初の対応から

当初、ユウジさんが教室から飛び出さないこと、そして教室内の規律を保持することに指導の重点が置かれました。本人が飛び出した時には職員室に連絡し、空き時間の先生や教頭先生が対応して、保健室で落ち着くまで休ませてもらう体制を組みました。しかし、表面的な行動を抑えようとするだけでは、解決にはなりません。養護教諭も加わって、ユウジさんが落ち着いている時に、じっくりと話をし、本人の思いを聞き取るように心掛けました。

また、保護者は、当初シマダ先生の対応のまずさで本人が不安定になっていると考え、本人が困っている状況が理解できない様子でした。そこで、保護者とシマダ先生の懇談に養護教諭が加わり、保護者の願いをじっくりと聞き取ることにしました。何度か相談していくと、「本人は困っていて、どうすることもできずに不適切な行動をとっている」ことについて共通理解ができました。さらに、その原因を見極め、支援の方向を導き出すため、発達検査を実施して個別の指導計画を作成していくことを確認しました。また、現時点で無理に教室にとどめておく対応をするのではなく、一時的にユウジさんが落ち着いて学習することができる場が用意できないか検討を行いました。

### ◇ 本人が落ち着いて学習できる場に

検査の結果、認知機能にアンバランスな面が大きいことが明らかになりました。耳からの情報を処理することが苦手で、視覚的なヒントがあると理解しやすい傾向がみられました。実際に本人に話を聞くと、「教室の中では友だちの声や様々な音が気になって、頑張ろうと思っても集中できない」と話してくれました。そして、「学習が難しくなってきた分らないことが多い」こと、「家でも心配なことがあって、イライラしてしまう」こと等、素直に話してくれました。

本人は静かな場所で勉強したい、できれば検査を通じて親しくなった特別支援学級担任のところで勉強したいとの願いを述べるようになりました。この学校には特別支援学級が1学級しかなかったのですが、在籍している児童が原学級で学習する時間などを活用して、一部の時間、特別支援学級において指導することを検討しました。そして、特別支援学級の教室の中にユウジさん専用のコーナーを用意し、集中して学習することができるように簡易ついても用意しました。

#### ◇ 支援の実際

教室から離れて学習する時間を設けるにあたり、段階的な指導を検討しました。まず初めの1か月間は、情緒の安定と学習習慣の形成を重点に指導しました。1時間にプリント1枚だけでも、課題をやり遂げる習慣づくりを大切にしました。また、本人が得意な作業的な活動に取り組む時間も確保し、畑での作業に取り組みました。畑での作業が得意なユウジさんは汗をいっぱいかいて作業に取り組み、多くの野菜を育てることができました。その働きを多くの職員に評価してもらい、本人は満足そうでした。

2か月目からは、本格的に教科学習を進めることに重点を置きました。この時も自分で決めたプリントを最後までやり通すことと、その結果を自分でも評価することを大切にしていきました。本人が得意な計算問題を中心に基礎的な問題に繰り返し取り組むことで、少しずつ意欲的に学習に取り組むことができるようになっていきました。

#### ◇ 学級担任との連携

シマダ先生は、ユウジさんのことをいつも気にかけて、特別支援学級でのユウジさんの学習の姿を称賛した後、クラスではこんなことに取り組んだという話をしていきました。また、学級では、学習のルールを再度確認するとともに集団づくりのゲーム活動などに取り組み、お互いが生活しやすいように話し合いを重ね、違いを認め合える学級集団づくりに取り組んでいきました。

特別支援学級での学習場面では、絵カードを使って、教室での日常場面で好ましい行動・好ましくない行動を指摘する学習や、自分のいいところリストに、自分の長所や頑張っていることを記入する学習にも取り組みました。そして、ユウジさんが困ってしまう場面では、どんな行動をとればいいのか、シマダ先生も交えて一緒に相談する時間を設け、学級で学習する時の約束を考えていきました。そして、どうしてもイライラしてしまう場面では、先生に合図をして、特別支援学級に伝言に行く役割を与えてもらい、そこでクールダウンして確認しました。

#### ◇ 4年生の教室に戻って

4年生への進級を機に、ユウジさんは、すべての時間、通常の学級で学習するようになりました。本人も学年の切り替えを励みに、頑張りたいと話し、特に必要な時間のみ、特別支援学級で学習することができる体制を確保しました。定期的に本人と相談する時間を設け、本人の話をじっくりと聞くようにしていますが、4年生の教室で張り切って授業に取り組んでいます。

#### 事例から学ぶ

特別支援学級の弾力的な活用は、大きな集団の中でどうしても集中することが苦手な子どもたちの教育課題に迫るためには有効です。ただし、大きな集団で不適応行動があったからといって、すぐに取り出での指導を考えることは避けたいものです。学級内での配慮を十分に行い、学年での協力、支援員なども加わったTTの体制など、十分に検討した上で、どうしても必要な場合に、学級から離れて特別支援学級を活用した対応をとるようにしましょう。その場合も、担任間で連絡を十分に取り合い、特別支援学級での支援が、学級での支援に生きるように配慮し、教室でも温かく迎えられるように学級集団づくりを併せて行っていくことが大切です。